

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

平成28年10月29日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 人文科学研究所

職 名・学 年 助 教

氏 名 小 川 佐 和 子

| | | | | |
|------------------------|--|-----------------------|---|--|
| 助 成 の 種 類 | 平成27年度 ・ 研究成果物刊行助成 | | | |
| 研 究 成 果 物 名 | 映画の胎動:一九一〇年代の比較映画史 | | | |
| 著者・編著、作成者全員の所属・職 ・ 氏 名 | 人文科学研究所・助教・小川佐和子 | | | |
| 学術書・論文集等について | 出版社・印刷会社等名 | 発行年月日 | 配 布 先 | |
| | 株式会社人文書院 | 2016年2月 | 市販のほか、研究者への献本、所属学会、各大学図書館・生協書籍部、東京国立近代美術館フィルムセンターなど国内外の関連研究機関 | |
| 成 果 の 概 要 | タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。合わせて、刊行・作成された研究成果物をご提出(ご提示)下さい。 | | | |
| 会 計 報 告 | 事業に要した経費総額 | 3,313,000 円 | | |
| | うち当財団からの助成額 | 1,000,000 円 | | |
| | その他の資金の出所 | (機関や資金の名称) 京都大学総長裁量経費 | | |
| | 経 費 の 内 訳 と 助 成 金 の 使 途 に つ い て | | | |
| | 費 目 | 金 額 (円) | 財団助成充当額 (円) | |
| | 組版代 | 965,000 | 965,000 | |
| | 製版代 | 330,000 | 35,000 | |
| | 刷版代 | 260,000 | | |
| | 印刷代 | 280,000 | | |
| | 用紙代 | 260,000 | | |
| 製本代／装丁代 | 268000／150000 | | | |
| 編集経費代 | 800,000 | | | |
| 合 計 | 3,313,000 | 1,000,000 | | |
| 当財団の助成について | (今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 学術書をめぐる昨今の厳しい出版情勢のなか、本助成により博士学位論文を世に出すことができました。心より感謝申し上げます。若手にとって学位論文を出版することが研究者として自立するため大変意義のあることは疑う余地もなく、今後もこのようなご支援が続けられることはきわめて貴重なものであると感じております。 | | | |

2016年2月20日に『映画の胎動——一九一〇年代の比較映画史——』という書名（書名変更手続き済み）で、366ページの単著を株式会社人文書院より刊行した。本書は、早稲田大学文学研究科に提出した博士（文学）学位論文『1910年代の比較映画史研究：初期映画から古典的映画への移行期における映画形式の形成と展開』（早稲田大学文学学術院、2012、総頁数280）に大幅な加筆・修正を施したものである。

本書の目的は、無声期の映画を対象に、映画がプリミティブな初期映画から20世紀を代表する大衆娯楽／芸術へといたる歴史を、19世紀およびモダニズムの諸芸術と映画の連関を軸としながら記述することである。

自律した表現形式として確立していなかった草創期の映画は、文学や演劇、美術、音楽といった既存のハイカルチャーを換骨奪胎しながら発展していった。伝説的な舞台女優の十八番の場面を映画で見ることができたり、見覚えのあるルネサンス絵画が動く絵として再現されていたり、古典文芸の物語を時代考証の練られた紙芝居のように追うことができたり、大道芸人のショーは映画館という空間をまるで寄席にいるかのように変えたりした。他方、日本映画は、講談や新派芝居などの大衆芸能の延長線上に位置づけられていた。しかも種々雑多なこれらの映画は、当時同じ一つのプログラムに盛り込まれていた。この時代の映画はいまだ芸術／娯楽ジャンルとしてマージナルな存在であったがゆえに、映画をとりまくあらゆる隣接領域との関係を切り離して考えることは不可能だったのである。本書では、映画研究の文脈のみでは捉えきれないそうした初期映画の多彩な様相を、19世紀芸術との断絶と捉えるのではなく、また従来の進歩主義的映画史観にもとづくことなく、むしろ前世紀からの連続性を持った表現形態として分析し、「映画」および「映画史」そのものの定義を改めて問い直すことを試みたものである。

本書でもう一つ追求しようとしたことは比較映画史の可能性である。それゆえ研究対象は、1910年代において主要な映画産業国であったフランス、ドイツ、ロシア、イタリア、そして日本の映画形式とした。初期から古典の時代へと映画というジャンルが生成していく移行期の一〇年間に時代を絞ったものの、この時代の映画史全体の生成の様相を捉えるためには特定の国や地域にとどまらず主要な映画産業国を対象とした越境的な視点を持つ必要があった。見覚えのあるデンマークの俳優がロシアのプロマイド写真ではロシア名に変えられて人気を博していたり、フランス映画がオランダ語字幕やスペイン語字幕、ドイツ語字幕つきで現存していたり、当時の映画雑誌の半分以上は外国映画の宣伝や批評記事で埋め尽くされていた。そうした実態を鑑みると、一国映画史の記述では、映画の本質である偏在性や国際性を明らかに見過ごすことになる。映画は誕生時からインターナショナルなメディア芸術であり、国境を越えた比較検討を要するが、未だそうした先行研究は僅少である。

方法論に関しては、先行研究を踏まえ、テキスト分析や形式比較といった映画作品に依拠し

た研究方法に加え、当時の映画雑誌や新聞など未公刊・未発表の一次資料による実証的な映画史分析を丹念に行い、映像のみをもとに記述することに特化せず、観客の反応や批評家の記事、広告による宣伝効果や、同時期にどのような外国映画が輸入されていたのか、といった観点からも分析し、多角的な映画史研究を行った。

このように本書は、研究の沃野でありながら未踏の土地も多い無声映画を幅広い視野から分析するため、他芸術と映画との相互交流、および映画の国際性に着目した議論を提示している。映画と他の芸術ジャンルとの密接な関連を明らかにし、無声時代の映画が孤立した存在ではなく、同時代の美意識の中で発展しつつ独自の形式を獲得していったとする考察を通して、今後の芸術史研究における領域横断的な分野の開拓を期待するものである。